

＜資料＞ NPO 法人和音の失語症会話パートナー養成講座について

1. 失語症会話パートナー養成のあゆみ

和音はその前身を含め、活動を始めてから今年で 15 年目を迎える。その中心事業である失語症会話パートナーの養成を軸に、その歩みを振り返りたい。

発端は 1998 年にカナダのオーラ・ケーガンという言語病理学者が、「失語症者のためのサポート付き会話：会話パートナー養成の方法と資料」という論文をアメリカの「APHASIOLOGY(失語症学)」という学術専門誌に発表したことである。

東京近辺で地域リハビリテーションに従事していた言語聴覚士(ST)の勉強会である「地域 ST 連絡会」では、当時失語症者が社会の中で孤立している現状を打開するには、コミュニケーションの支援者が必要だということが議論されており、ケーガンの提唱する「会話パートナー養成」は画期的な方策と思われた。そこで翌年、数人の ST が故遠藤尚志 ST 率いる失語症海外旅行団に同行し、トロントにあるケーガンの施設と実際の会話パートナーの活動を見学して大変感銘を受けた。

それを地域 ST 連絡会で報告し、日本でも会話パートナー養成を始めようと呼びかけたところ、20 名の ST が結集し、1999 年に「失語症会話パートナー養成部会」が発足した。ケーガンの方法を参考に日本で実施するための方法を検討し、テキストを作成するなど、一年の準備を経て 2000 年 10 月に第 1 回「失語症会話パートナー養成講座」を開講した。失語症についての知識だけでなく、具体的なコミュニケーション方法を、ロールプレイを使って練習するのはケーガンが提唱したやり方であるが、ロールプレイの際に、ST がチューターとして小人数グループを指導するやり方は、この第 1 回養成講座の時に編み出された方法である。多くの ST が参画したメリットを活かしたこの指導方法は、その後展開した様々な失語症講座でも好評を博し、和音の講座の特徴として現在まで変わらず行われている。

この時点の養成講座は、7 か月をかけて 1 日講座を 4 回、実習(当事者との会話練習)を 5 回行っていた。実習は主に失語症友の会や失語症者の自主グループの協力を得て行っていた。毎回約 30 名の会話パートナーを養成し、多くの修了者がその後も活動を継続した。

2003 年からは、2 日間でほぼ同様のことを学ぶ医療・福祉・介護専門職向けの短期講座も開講した。

5 年間養成講座を実施した後、さらに活動を発展させ経済的・社会的な基盤を整えるために、NPO 法人化することを決定し、2005 年 4 月に NPO 法人言語障害者の社会参加を支援するパートナーの会和音として再出発した。その後、養成講座、専門職向け講座の他に新たに失語症者の家族向け講座、高齢者のコミュニケーションサポート講座も開講した。また、豊島区高松に事務所を構え、新宿の専門学校の一室を借りて、新宿ことばの相談室を開設した。失語症の人

が会話を楽しむ場として、事務所と新宿ことばの相談室で失語症サロンを開催している。法人化することにより責任をもって個人支援のコーディネートをすることが可能になったため、会話パートナーが個人宅に訪問する訪問事業も開始した。事務所では、電話相談・面接相談も受けている。

この間、社会の側にも少しずつではあるが、障害者の社会参加やそのための支援についての認識が進み、会話パートナーについても徐々に全国に知られるようになった。全国各地からの講演依頼も相次ぎ、年間5～10か所で講演を行っている。(和音ホームページの「和音の歩み」参照)

会話パートナー養成講座では、2006年度から講習の中で、失語症の方々に、失語症講師として会話実習に参加して頂くようになった。これは受講者にとって貴重な機会であると同時に、当事者にとっても、新たな社会的役割を得るという点でエンパワメントにつながる重要なことだと考えている。

その後ボランティア希望者が漸減してきたこと、和音の事業が拡大し、養成講座スタッフの人員確保が難しくなってきたことから見直しを行い、2010年度から2012年度までの3年間は15名定員とし、少人数のスタッフで運営する形態で実施した。少人数で運営できればSTの少ない地域でも養成講座を実施できるので、そのモデル構築の意味合いも含めての試行であった。この点では、4名のSTがいれば15名程度の会話パートナー養成ができることが確認できた。

2012年度終了時点で、ボランティア対象の養成講座、家族対象、専門職対象の各講座の内容が重複している部分が多いこと、各講座とも家族、専門職等の属性に関係なく受講希望があること、機を逸すると一年待たなければならないことなどを考慮し、より受講者のニーズに沿う形にするための見直しを行った。その結果、三講座を統合し基礎・実技・実習の3ステップに再編成し、失語症コミュニケーション支援講座として、年に2回開講することになった。基礎講座当日、家族は相談交流会にも参加できる。各ステップを分けて受講することもできるようにしたため、選択の自由度が増えた。3ステップすべてを修了した人には、失語症会話パートナー講座修了証を発行する。それにより、会話パートナーとしての自覚を持ち、活動を継続してもらうことを狙っている。現在の講座の概要を表に示す。

和音の養成講座は15年間で改良を重ねてきたが、講座で伝達する内容は基本的に変わっていない。一般の人にわかりやすい講座をめざし、「失語症者と対等な立場に立ち、スムーズにコミュニケーションが取れるように支援し、社会との懸け橋となる人材」を養成してきた。当初は他のSTから、一般の人が失語症者とコミュニケーションを取るのには難しい、と養成を疑問視する声もあった。しかしこの15年の実績からそのような声は少なくなり、最近ではSTの県士会が会話パートナーの養成を担うケースも出てきており、STの養成課程の教科書にも「失語症会話パートナー」という言葉が採用されるまでになっている。

しかし残念なことに公的なレベルでは、失語症会話パートナーはもちろん、失語症についてもまだまだ理解されていない。役所の窓口の対応や選挙の際に、無理解による不快な思いや不自由な思いをされた失語症の人の声も届いている。

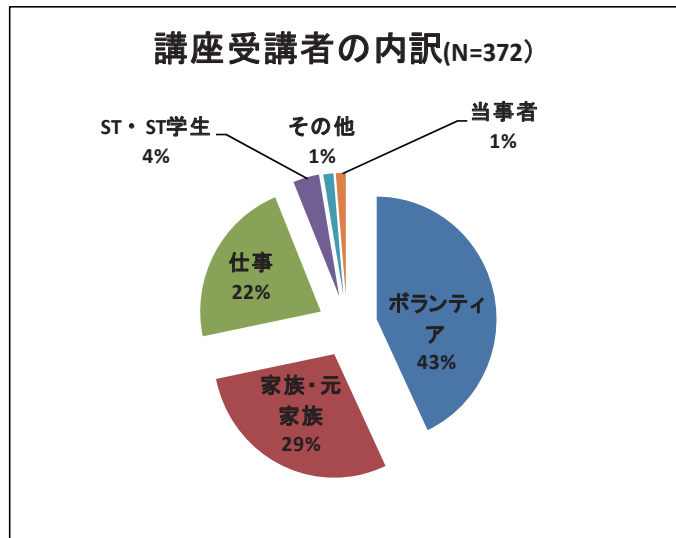
また、会話パートナー同士の横のつながりという点では、和音の場合は広域対象の養成であるため、顔を合わせる機会が少ないのが課題である。年に1～2回のフォローアップだけでなく、和音の特性を生かしたさらなる工夫が必要であると考えている。

失語症コミュニケーション支援講座の概要

A 基礎講座		B 実技講座	
1	失語症についての基礎知識(100分)	1	会話技術演習②(応用編)(120分)
1)	原因	1)	1日目の会話技術演習の復習(ポイントの確認)
	症状(4側面と数字・計算)と対応方法	2)	会話とは
2)	失語症のタイプ	3)	ポイントを書きながら会話を進める
	保たれる側面	4)	トータルコミュニケーション
	一緒に起こりやすい症状	2	失語症当事者との会話実習(150分)
	間違いやすい他の障害	1)	会話のポイント確認, 会話パートナーのモデル
3)	失語症の回復	2)	失語症の人との会話実習
4)	失語症のリハビリテーション	3)	会話の振り返り
5)	退院後の生活	3	全体のまとめ(5分)
	日常場面での困難	1)	講座全体をまとめて
6)	社会資源について	2)	失語症の人との豊かなコミュニケーションのために
2	失語症から起こる様々な問題(20分)	C 実習	
1)	当事者・家族の声	1	実習希望者向け実習ガイダンス(30分)
	障害が理解されにくい	1)	ボランティアの心得
2)	交流が少なく孤立しがち	2)	実習の方法
	自分に自信がもてない	3)	具体的打ち合わせ
	家族の悩み	2	現地実習(120分×5回)
3)	社会資源の不足	1)	活動の場(友の会、サロン他)での会話支援
	失語症会話パートナーとは		活動後感想シートの記入提出
	失語症会話パートナーの役割	2)	活動内容へのアドバイス
	コミュニケーションのバリアフリー	3)	修了証授与
3	会話技術演習①(基礎編)(160分)		
1)	会話の基本		
	ゆっくりはっきり		
2)	繰り返し・別の表現		
	先回りしないで待つ		
3)	漢字で要点を書く		
	選択肢を示す		
4)	身振りや表情		
	コミュニケーションを助ける道具		
5)	はい—いいえで答えられる質問		
6)	訂正しない・確認		

2. 失語症会話パートナー養成講座 修了者アンケート 結果

和音では、前述のように2000年より失語症会話パートナーの養成を開始し、330名(2013年度現在)を養成してきた。講座受講者の数は372名(中断者を含む)にのぼる。講座受講者の内訳は、右図の通り。ボランティアが43%、家族が29%、仕事で関わっている人が22%であった。



今回、全国会話パートナーのつどいに先立ち、修了生にアンケート調査を行った。修了者のうち宛先が確認できた300名にアンケートを送付し、83名(回収率28%)から回答を得た。

◇アンケート項目

- 問1. これまでに講座で学んだことを活かしましたか？
- ① 活かすことが出来た →問2へ
 - ② 活かせなかった →問3へ
- 問2. どこで活かしましたか？(複数回答可・カッコ内はどちらかに○)
- ① 失語症友の会や自主グループ(現在も・過去に)
 - ② 会話サロン(現在も・過去に)
 - ③ 個人宅訪問(現在も・過去に)
 - ④ 仕事で(現在も・過去に)
 - ⑤ 家族として/友人・知人として(現在も・過去に)
 - ⑥ その他()
- 活動地域/団体名称()
- 問3. 活かせなかった理由を教えてください。(複数回答可)
- ① 時間がない
 - ② 活動場所がない
 - ③ その他()
- 問4. 会話パートナーの活動に対するご意見やご要望
- []

◇アンケート結果

問1 <講座で学んだことを活かしたか>

活かしたという人が 72 名(87%)と多く、なんらかの形で実際に役に立ったと考えられる(図1)。

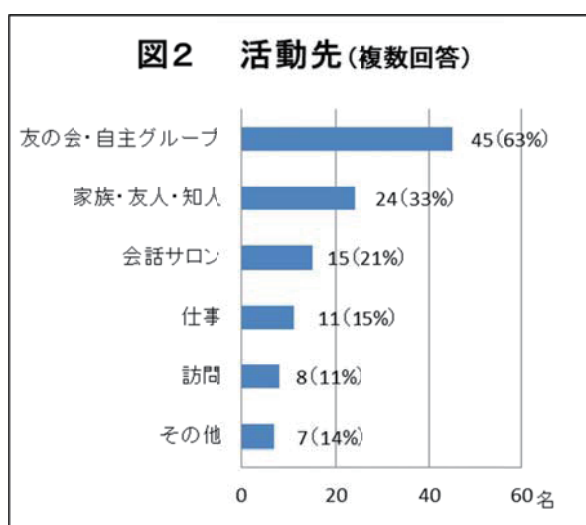
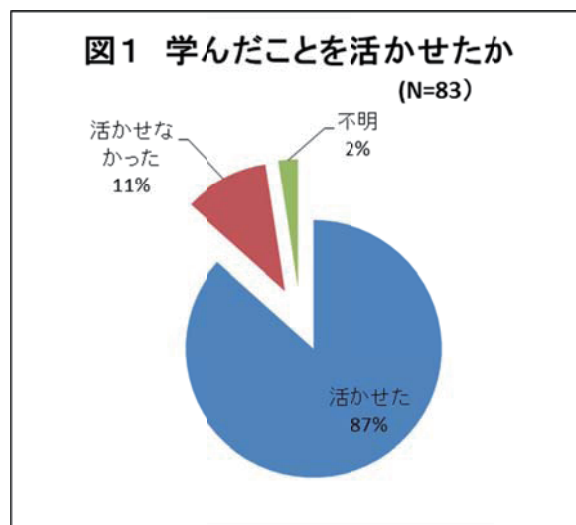
問2 <どこで活かしたか>

どこで活かしたのか活動先を尋ねると、「失語症友の会や自主グループ」(45 名)が最も多く、次いで「家族・友人・知人として」(24 名)「会話サロン」(15 名)の順であった(図2)。

72 名のうち 63%の人が失語症友の会や失語症の人が集う自主的なグループの中で活かしていた。和音が主催する会話を中心としたグループ活動の会話サロンを含め半数以上はこのようなグループを支える形で講座を活かし、活動していることがわかった。なお、これらのグループのいくつかは、講座の最後に行う実際の研修(実習)の場として、養成の最中から参加している場合もある。

家族や友人知人との会話の場面において、学んだことを活かしたという人は 33%であった。講座受講者の 29%が失語症の人の家族であることから、身内や知人が失語症になったことで、はじめてこの障害を知り、障害のことを理解し会話をしたいという動機で受講する人が多いことが推察される。仕事上に活かしたという人は15%であった。また、11%の人が訪問事業に関わっていた。主に和音がコーディネートして実施している訪問事業(パネルディスカッションの資料参照)に携わっている。

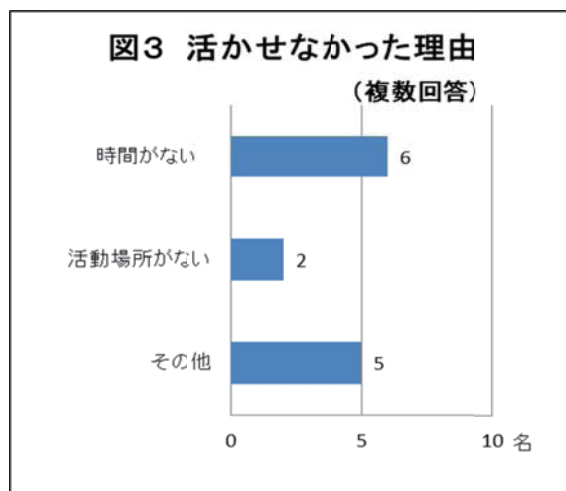
活動先に関しては、講座を活かしたという72名中42名は単独の活動場面で活かしていたが、30名は複数の活動場面で活かしたと答えた。その組み合わせは17種類に及び、友の会と会話サロンと訪問というように、3種類の活動を経験している人が9名、2種類の活動を経験している人が21名いた。訪問を除く、具体的な活動場所は関東の失語症友の会9か所、自主グループ16グループ、その他の福祉施設、介護施設が9施設となっている。



問3 <活かせなかった理由>

一方、講座を実際に活かせなかったと答えた9名にその理由を問うと、時間がないためが多く、活動場所が近隣に見つからない、転居してしまったので、活動していないという理由であった(図3)。

アンケートの回収率から考えると、回答を寄せてくれた人の多くは、なんらかの活動をした人や現在活動中の人である可能性が高い。



以下に自由記述に記された要望や意見を分類して掲げる。

【活動の拡大や充実を望む】

- 会話パートナーが社会的にもっと取り上げられて活動しやすくなれば良い
- 和音が当事者さん、会話パートナーの集う場をいろいろな地域に作れないだろうかと思う。和音の求心力を高め、人を集められる組織として力強く発展することを願う。
- デイサービスに、40代・50代の失語症の方がいる。高齢者の中に入り、会話もできず、表情が暗くなっている。デイサービスでも活動できないか。
- 施設利用者へのケアに関わる人達への講座を、身近なところで受けられる機会がほしい。プロでも知識がない。地域に活動の場を作ってほしい。
- ちょっとした会話技術は、広く一般の方に知ってほしい。
- 当事者に寄り添って、その方の考えが広がる様なお付き合いができるボランティアもなくならないで欲しい。
- 患者さんに訪問会話パートナーを紹介したこともあり、活動の輪が広がっていくとありがたい。
- 新人の育成に於いて…敷居を高くしないで、まずは参加してもらい、性格的に合う人(前向き、明るい)を発掘できると嬉しい。
- 介護施設の職員さん等が受講の機会に多く恵まれることを願う。

【会話パートナーとしての資質の向上】

- 小さなグループでの勉強会が頻回に、都内近郊の色々な場であると良い。
- 勉強会等があったらありがたい。まだまだわからないところがたくさんあるので。
- 時々しかお手伝いできない場合、その方の症状を把握することが難しく、その方が会話を楽しめていたのかどうか、とても気になる。ご本人からの感想を後で聞けるとよい。
- 月1回活動している。丁度よい
- タブレットがあればよかったと思う。

【連携の必要性】

- 横のつながりを持つ機会が少ない。
- 他の方達の活動内容を知りたいと思う。
- 会話パートナーのネットワークが広がり、また定着することを切に願っている。
- いま、会話パートナーとして失語症の人々と会話をしているパートナーが、どれだけ、どんな形にいるのかというような情報を、会話パートナーにも公開して欲しい。SNS やホームページでの情報の公開をしてほしい。
- 友の会にも参加したが、同様のボランティアがいなかったので、少し辛かった。義父の接し方が少しわかって良かったが、言葉回復までには至らなかった。

【意義を感じる、啓発になった】

- 豊島の会に参加したが、会話パートナーとして入られた方が長期間にわたって支援をされ、その成果として互いに信頼関係を強く築いている様子にとっても感動した。現時点では、家族あるいは友人・知人として会話パートナーをしているだけだが、もう少し落ち着いたら、互いに支え合う場として仲間に入れてもらえたらと思う。
- 失語症と一言でいえないくらい、いろいろな方々がいるのがわかった。
- 外出困難な重度の失語症者に、歌、発語、計算問題、手紙等を 14 年間続けてきて、高齢（80 歳）の方でも進歩している。私にとってもやりがいのある活動。
- 母の脳梗塞による失語症に驚き、とまどったが、和音で様々なことを学び（特に実習で）、実際に役立ち、感謝している。
- 失語症の理解を社会に広めるために必要な活動だと認識している。
- 手話の講習先で失語症会話パートナーの講習のを知り、講習の機会を得て、視野が広がった。認知症との違いを学び、周囲の方の言動を見直し、理解が深まった。この支援がもっと広がる必要がある。講習の機会があれば、再び学びたいと思っている。
- 身内として母の失語症のケアをするむずかしさを感じる。この活動の意義を強く感じる。

【活かせなかった理由】

- 時間がとれるようになったら、また参加したい。
- 仕事が忙しく、会話パートナーのスキルアップの機会がありながら、受講できていない。
- 静岡県伊豆市に4年前に転居し、この地での活動をしたいのだが、車を持っていないためと、近くにグループがないため活動できなく、残念に思う。

第2回失語症会話パートナー全国のつどい実行委員会

委員長	田村洋子	会話パートナー部会
委員	安保直子	阿刀田英子
	石戸純子	泉マヤ
	小谷朋子	佐川京子
	木村逸子	佐々木恵子
	小林久子	事務局 新川縷子
	野副めぐみ	編集協力 石上志保
	安田容子	写真 酒井憲太郎

第2回全国失語症会話パートナーのつどい 報告集

2015年2月15日発行

編集・・・つどい実行委員会

発行・・・NPO法人

言語障害者の社会参加を支援するパートナーの会和音

〒171-0042 東京都豊島区高松 2-48-3 杏コート・W100号

電話・ファックス 03-3958-1970

<http://npowaon.jp>

